

# アルゼンチン ババア

映画文学人生論

原作：よしもとばなな (2002年) 幻冬舎」  
監督：長尾直樹 (2007年) 脚本：長尾直樹  
出演：涌井悟 役所広司 撮影：松島幸助  
涌井みつこ 堀北真希 音楽：周防義和  
涌井良子 手塚理美  
アルゼンチンババア/ユリ 鈴木京香

「かあちゃんにもう一回イルカを見せてやるか」「うん」

よしもとばななは村上春樹とともに、国際的に知られている日本人現役作家の一人。その作品は多くの外国語に翻訳されている。

外国人の愛読者が多いのに日本人である私が読んでいないのはおかしいが、ばななは私の娘の世代である。それに、父親の吉本隆明の思想がよく理解できなかったことへのもやもやとした気持が邪魔になった。一度だけ娘の本棚にある『TSUGUMI』を読みかけて、やめたことがある。

それが単なる食わず嫌いにすぎないかもしれないということに気がついたのは映画『アルゼンチンババア』を観たことによる。原作も読んだが、これは、小説というより大人の童話で、面白い。

みつこ（堀北真希）の世界は平凡だったが、母（手塚理美）が死んだ時、その世界は消えた。それは、みつこが十八の時のことだった。父（役所広司）は母の葬式もせず、行方不明になった。

しばらくして、父がアルゼンチンババアのところに出入りしていることを友達から聞き、みつこは腹を抱えて、涙が出るくらい笑い転げた。

「だって、あの、アルゼンチンババアだよ！」  
「全くよ、アルゼンチンババアとできてるってか？」

アルゼンチンババアは遠い昔、本場アルゼンチンでタンゴを習っていたらしい。もしかしたら半



# アルゼンチンババア

映画文学人生論

分はアルゼンチン人かもしれないという噂もあった。街はずれに廃屋みたいなビルがあり、そこにひとり住んでいた。墓石や庭石を彫る仕事をしていて職人の父はその廃屋に転がり込み、仕事をやめて、タンゴの踊り方を習っていたのである。

「連絡くらいしてよ！」とみつこは怒って言ったが、やがて父と同じようにアルゼンチンババアからタンゴを教わるようになった。

私は、自分ががらにもなくタンゴが好きだということも思い出した。踊れないが、せつかくこの世に生まれてきたのに残念だという気持はある。

みつこの父はアルゼンチンババアの家の屋上で母の墓と曼荼羅をつくっていた。白い墓石は小さな、イルカの形をしていた。映画では、「母ちゃんにもう一回イルカを見せてやるか」「うん」という会話のやりとりがあり、みつ子と父が海底にその墓を置いてくる感動的なシーンがある。原作ではそのシーンはない。

曼荼羅は父が見た宇宙をモザイクで再現しているもので、宇宙の中心には大日如来ではなく、アルゼンチンババアがいるという。五十歳の彼女は赤ん坊を産み、六年後に死んだ。

曼荼羅は多元的宇宙をあらわしているという。私は修善寺の大患の前後、夏目漱石がジェームズ『多元的宇宙』を読んでいたことを思いだした。

父が彫るイルカの曼荼羅白い墓